

同窓会報



しんちゃん1号初出場で決勝進出!!
(92' NHKロボットコンテスト)

第 10 号
'92. 12. 15
豊橋技術科学大学同窓会



挨拶にかえて

豊橋技術科学大学同窓会名誉会長 学長 佐々木 慎 一

「大学はほぼ20～25年のライフサイクルをもつ。そしてこのサイクルは創成期、成熟期、衰退期を含む。本学はこれまでに創成と成熟を経過し、これからは衰退に入っても仕方のない時期に来ている。ここで初心を忘れてはならない。初心を忘れてはただの88番目の国立大学になってしまう。創設時の心を思い起こし衰退期を再生期に変えねばならない。」同窓会報前号所載本多波雄前学長のお言葉の一節である。

創設後15年経ったいまだ漫然と過しては衰退期に入ってしまうかも知れない。世の中が平穩無事であればそれに安住してしまって衰退の途を辿ることになるのかも知れない。しかし、幸いというべきか大学の抱える諸事情は内外ともに決して平穩ではないのである。この平穩ならざる条件を克服してゆくためには、大学のあり方を常にはっきりさせておかなければならない。常に何か考え将来に向けて種々の策を練り実践してゆかねばならない。

大学は改革を迫られている。大学はこれまで社会と遊離し超然としていてもそれはそれで宜しかった。しかし、いまそれは許されない。不断に大学のあり方を点検し評価しつづけることが義務となったのである。どんな研究が行われているか。どんな教育を学生に授けているか。その教育を学生はどう評価しているのか。これらについて常に点検し直すべきことは速かに正す。学生をして入ってよかったと思わせるキャンパスを常に確保する。一口にいえば簡単そうにきこえようがなかなか容易なことではない。これらを行うには先づそのための仕組みが要る。かくて本学は自己点検・評価の委員会を学内規則として発足させ、今は実施の段階に入っている。大学は学生に十分な知的満足

感を与えるものでなくてはならない。減る一方の18才たちの顔をどれだけ多く本学に向けさせるか。卒業後の進学が技術科学大学だけではなくなりつつある高専卒業生に、本学のよさをどれだけ深く理解させるか。研究以上に教育に熱意を傾けることで、かれらに満足を与える大学づくりが急務なのである。



教育課程の編成はいまのままでいいのか。既設の課程だけでは現今の産業界の要請に対応しきれぬ時代に入ってきている。昭和62年には各種専門分野においてコンピュータを使いこなし高次のプログラムを自らつくれる技術者を養成すべく知識情報工学課程を誕生させた。明春3月には第1回の修士修了者を出す。地球環境がこれだけ問題になっているとき、そのこれ以上の破壊を阻止し、水と緑のわれらが惑星をいかに美しく維持するか、この方面の工学を教授し研究する組織だってあってもいいのではないか。エコロジー工学課程の新設はいま文部当局からこれの実現について格別のご理解を頂いている。

初心を憶いつつも創設の頃とはまた別の熱気の漲る中で一同は過している。

本多先生どうぞご安心下さい。

同窓会会員諸兄姉。母校の発展に今後とも惜しみなきご支援とご協力をお願いします。私たちも各位のご期待に応うべく最大限の努力を致します。

以上

学 内 近 況 報 告

エネルギー工学系

関 東 康 祐

卒業生、修了生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。同窓会会報第8・9号発行（平成3年12月15日）以降の系内の動向をお伝えします。

まず、教官の異動ですが、平成4年2月1日付けで第二講座の鈴木新一先生が、3月1日付けで第一講座の柳田秀記先生と第三講座の関東が助教授に昇任しました。第二講座の袁建先生が2年間助手として石炭燃焼の研究をされていましたが、3月31日付けで母校である中国華中理工大学へ転任されました。4月1日付けで第三講座の高木章二先生と上村正雄先生が教授に昇任されました。また、3月まで第三講座の本間研究室で博士課程に在籍していたQuasim Hussain Shah先生が教務職員として採用され、本間先生と共に破壊力学の研究をされています。7月1日には本学の第2回生でもある第一講座の古内正美先生が金沢大学工学部助手として転任されました。新任地における一層のご活躍を期待します。

また、6年あまりの間事務補助をされていた河合美鈴さんが8月31日付けで退職されました。皆様のなかにもお世話になった思い出のある方も多いかと思えます。後任には野亦真理子さんが9月1日付けで着任され、羽谷さんとともに事務を担当しております。また、昨年10月30日より文部省在外研究員としてアメリカのミシガン大学へ出張されていました畔上先生が8月29日に元気に帰国されました。

現在のエネルギー工学系のスタッフは以下のとおりです。

[第一講座：熱・流体工学講座]

教授：後藤圭司，三田地紘史，日比昭

助教授：中川勝文，北村建三，柳田秀記

助手：胡 勇，鈴木孝司

[第二講座：エネルギー変換工学講座]

教授：大竹一友，小沼義昭，蒔田秀治

助教授：岡崎建，吉川典彦，鈴木新一

助手：成瀬一郎

[第三講座：機器設計学講座]

教授：竹園茂男，本間寛臣，高木章二，上村正雄

助教授：埜克己，畔上秀幸，関東康祐

助手：浦風和裕，江崎昇二

教務職員：Quasim Hussain Shah

[技 官] 徳増学，森川正治，神谷昌宏

[事 務] 羽谷満小，野亦真理子

系長は後藤先生がされております。

次に就職状況ですが、折からの不況でなかなか厳しい見込ではありましたが、それにもかかわらず、400社以上の求人申込があり、ほとんどの就職希望学生が内定を受けております。これもひとえに皆様先輩方のご活躍に負うところが大きいと存じております。

また、エネルギー工学系を紹介するパンフレットが作成されました。鈴木新一先生を中心として若い先生方のご努力で大変きれいな仕上がりです。特に就職先一覧を見ますと全国的に様々な分野で活躍されている皆様の姿が思い起こされます。きっと皆様にご覧になっていただける機会もあることと思います。

変わったところでは、8月30日に行なわれました全国大学対抗ロボットコンテストに本学からも参加しましたが、第三講座の江崎先生が指導教官として参加されました。いろいろご苦勞もあったことと思いますが、見事ベスト8まで進出しました。TV放送もされましたので、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。

最後になりましたが、エネルギー工学系職員一同、卒業生、修了生の皆様方のご健康と一層のご活躍をお祈り申し上げます。

生産システム工学系

梅 本 実

卒業生、修了生の皆さん、それぞれの職場でそれぞれの仕事に励んでおられることと思います。暑かった夏もそろそろ終わり、クーラーの音のしなくなったD-棟より系の近況をお知らせします。

この1年間の教官の人事移動は以下のようです。91年11月に工程制御研究室の助手をされていた王先生が中国の瀋陽工業学院へ講師として移られ、代わって本学大学院生であった前田さんが工程制御研究室の教務員に就任されました。この時期にはまた、機械材料研究室の村田先生が助教授に昇任されました。92年4月には精密加工の星先生が国際協力事業団の専門家として、2年間の予定で、インドネシアへ赴任されました。そして、松田先生が精密加工研究室の教授として、岐阜高専から着任されました。同じ時期には本学大学院生であった橋爪さん、陳さんがそれぞれシステム解析研究室、精密加工研究室の助手に就任されました。また、竹村先生がシステム解析研究室の助手として鶴岡高専から、井上先生が機械材料研究室の助手として沼津高専から着任されました。システム解析研究室の助手の猪股先生が、静岡理工科大学へ講師として移られました。

外国人の教官の動きもいくつかありました。91年9月にはモスクワ鉄鋼及び合金大学からAKUMOULIN先生が材料保証研究室の助手として来られ、92年9月までおられました。92年1月にはノースダコタ大学からBANDYOPADHYAY先生が精密加工研究室の助教授として、さらに92年2月にはメキシコ国立工科大学からCABANAS先生が接合加工研究室の助教授として来られました。本系にはこれらの方に加え、留学生はもちろん、研究生、訪問学者という形でも数多くの外国の方がおられ、国際色豊になってきています。

本系からの長期外国出張としては、工程制御研究室の寺嶋先生が文部省在外研究員として91年9月より1年間ドイツ・ミュンヘン工科大学へ行っておられ、また、92年9月からは塑性加工研究室の牧先生が同じく

文部省在外研究員として1年間、アメリカ・マサチューセッツ工科大学へ行かれています。

2系の事務を3年間担当されていた三輪さんが92年5月より8系に移られ、代わって伊藤さんが5系より来られました。

92年8月12日生産システム工学系の創設と発展に多大の貢献をされた本学名誉教授の永井先生が肺癌のため逝去されました。73歳でした。謹んでご冥福をお祈りします。

就職状況ですがこのところの景気の落ち込みが反映し、今年度は598社（去年は714社）からの求人にとどまりました。とはいえ就職環境は売り手市場であるという状況に変わりはありません。

現在の生産システム工学課程、生産システム工学専攻および生産システム工学系の講成は以下の通りです。

1年生 17名, 2年生 17名, 3年生 60名,

4年生 66名,

修士1年 58名, 修士2年 56名,

博士1年 7名, 博士2年 1名, 博士3年 1名

[加工学講座] 中村教授, 岡根教授, 星教授, 堀内教授, 松田教授, 牧助教授, 梅本助教授(工作センター), BANDYOPADHYAY助教授, CABANAS助教授, 福本講師, 原田助手, 陳助手

[材料学講座] 川上教授, 森永教授, 小林教授, 新家助教授, 村田助教授, 竹中講師, 横山助手, 井上助手, AKUMOULIN助手, 山本教務員

[生産計画学講座] 北川教授, 西村教授, 野村教授, 小野木助教授, 寺嶋助教授, 三宅講師, 堀畑助手, 橋爪助手, 竹村助手, 前田教務員

学系長は岡根先生です。

なお、材料加工システム研究室は、92年4月より計測システム研究室と名称が変更になりました。

電気・電子工学系

残暑も峠をこえ、秋風とともに爽やかな季節となってきましたが、卒業生・修了生の皆さん元気に御活躍のことと思います。ただ景気の方が今一つですが、3系出身の諸君から不況をふきとばすような新商品の開発を期待しております。さて前回の同窓会報（平成3年12月）から、はや一年がすぎようとしていますが、電気電子工学系教官には大きな動きがありました。まず、本学の設立当初から頑張ってきた、野口精一郎教授および榎本茂正教授が平成3年4月をもって退官されました。榎本先生は引き続き静岡理工科大学電子工学科教授として教鞭をとっておられます。また基礎大講座の西垣敏先生は4月から九州工業大学工学部電気工学科に移られました。同じ大講座で野口先生と長らく研究されていた小山晋之先生も徳島大学総合科学部へ赴任されました。電子デバイス大講座では斎藤洋司先生が、成蹊大学工学部電気電子工学科に、高野泰先生が、静岡大学工学部電子工学科に移られました。以上のように、これまでになく多くの教官が3系を去られることになりました。これに対して、新しいスタッフが入ってこられました。まず、電気システム大講座にカナダのマックマスター大学からシャクラバルティ・アロックマ先生が講師として新しく加わりました。水野彰助教授のもとで高電圧応用の研究をされています。また電子デバイス大講座に韓国の嶺南大学から徐熙敦先生が助教授として赴任され、中村教授とともに半導体センサーに関する研究を行っています。更に同じ大講座の助手としてオランダのFOM研究所からハウシュブルック・フランク先生が来られ、並木

それでは、生産システム工学系教職員一同、卒業生及び修了生の諸君の一層のご活躍を期待しています。

朴 康 司

助教授のもとで表面の研究を行っています。このような異動を含めて平成4年9月時点での3系の教官スタッフは次のようになっています。

[基礎電気・電子大講座]

教授：藤井寿崇（系長）、英貢、太田昭男

助教授：服部和雄

助手・技官：山口一弘、前田勝典

[電気システム大講座]

教授：小崎正光（系長補佐）、榊原建樹

助教授：長尾雅行、水野彰（技開発センター）、

土屋幸男、アロックマ

助手・技官：水野幸男、滝川浩史、日比美彦

[電子デバイス大講座]

教授：中村哲郎、米津宏雄

助教授：徐熙敦、並木章、朴康司、石田誠

助手・技官：川人祥二、フランク、足木光昭

水野幸男先生は今年6月から来年の4月まで、カナダのウォータールー大学に留学されています。カナダに旅行される際には是非お立ち寄り下さい。

今年の就職状況は、バブル不況の影響で例年より厳しいのですが、それでも電気電子の学生は、まだ売り手市場と云えます。ただ、今後景気が更に悪くなれば来年はかなり難しくなるかも知れません。卒業生・修了生の皆さんにとっては、これからが真の実力を試すときが来ていると考えます。ただくれぐれも健康には注意され、頑張ってください。最後に、年一回位研究室に近況をお知らせ頂ければ幸いです。

情報工学系

卒業生・修了生の皆様は、いかがお過ごしでしょうか。私は、平成元年10月に赴任して以来3年近く経ったところで、本学での教育・研究もようやく順調に立ち上がって来ました。

本年は、情報工学系では教職員の異動がかなりありました。まず、現時点での教職員のメンバーは以下のようになっております。

[計算機大講座]

教授：中川聖一

助教授・講師：今井正治，湯浅太一，奥山徹

教務職員・技官：山本幹雄，塩見彰睦，片岡嘉孝

[情報処理大講座]

教授：阿部健一，臼井支朗，伊藤宏司

助教授・講師：橋口攻三郎，船橋賢一，池野英利

助手・教務職員：羅志偉，石井宏幸

[情報システム大講座]

教授：宮崎保光，田所嘉昭

講師：後藤信夫，村上純

助手・教務職員・技官：佐藤智夫，奥田隆史，

宮脇治雄

以上です。本年4月1日付けで異動がありました。計算機大講座の大岩教授は、慶応大学に移られました。情報システム大講座の秋丸教授は、朝日大学に移られ、情報ネット研究所の所長になりました。情報処理大講座の榊原助教授が、東海大学に教授として移られました。また情報処理大講座の助手の戸田先生は、舞鶴工専に移られ、舞鶴工専から本学出身の池野先生が講師として来られました。情報システム大講座

船橋賢一

の助手の鄧先生は、理化学研究所に移られました。

広島大学から伊藤宏司先生が、情報処理大講座の教授として赴任され、また羅先生が、名古屋大学博士課程を出られて、同講座の助手になりました。

計算機大講座では、本学博士課程出身の塩見先生が、教務職員になられ、片岡技官が、情報システム大講座から移動されました。

情報システム大講座では、本学博士課程出身の佐藤先生が助手になりました。

以上のように、情報工学系では、最近退官されたり、他大学に移られる先生が多く、また新しい先生が赴任されたりして、卒業生・修了生の皆様にとって、教官の顔ぶれがかなり変わったように感じられるかもしれません。

また昨年度からは、4系の3年次学生実験の内容は、以前の3・4系共通のものから、情報系独自のものになってきております。

社会で技術者として活躍されている皆様は、本学で学ばれた学問をベースに、職場での仕事を通じて、自分の力で、学問・技術をより深め、仕事に活かされていくことを望みます。

最近では、不況のせいで、本学卒業生の就職状況は厳しくなっているようです。

卒業生・修了生の皆様にとりましても、何かと厳しい時期になって来ていると思いますが、がんばって乗り切ってください。

近くにお越しの際は、以前の指導教官あるいは顔見知りの教官の研究室に是非立ち寄ってください。

物質工学系

皆様、おのおの職場で御活躍のことと思います。平成3年3月に高山雄二先生の御退官の後には、逆井研の助手としてノヴァク (Nowak) 先生が着任されまし

西山久雄

た。構成メンバーは、以下のとおりです。

工業無機化学大講座：亀頭教授，上野教授，逆井教授，大串助教授，角田助教授，前田講師，水嶋助手，ノ

バック助手、佐藤教務職員、齊藤技官。

工業分析化学大講座：小松教授、鈴木教授、神野教授、青木助教授、平田助教授、藤本助手、長畦助手、太田技官。

工業有機化学大講座：堤教授、伊藤（浩）教授、伊藤（健）教授、竹市助教授、西山助教授、永島講師、伊津野講師、松本助手、川口助手、坂井技官。

分析計測センターには、加藤助教授、服部助手が居られます。本年度より伊藤事務官が第2工学系へ移動したため、5系事務は奥田事務官がつとめるようになりました。

平成3年度は就職状況も良かったのですが、今年度はバブル経済の破綻を機に少しずつ景気が後退しているためか各会社も採用を減らしているようで、4年生や女子学生が苦戦しています。大企業などは、景気にとらわれないで定常的な採用ができないものかと、学生の立場にたつて憤りをおぼえます。皆さんの会社の

人事部は、そのような毅然としたポリシーを持ってはいないのでしょうか。景気に左右された日和見採用では、アンバランスな人事構成となり会社の将来に必ずしも良いとはいえないでしょう。実力と学歴で社会に出たとはいえ皆様も、少なからず好景気のおかげを感じずにはおれないでしょう。このところ、売手市場で学生も先生も驕るところがあったかもしれませんが。反省。

この何年か就職活動の一環として卒業生皆様が来学することが多かったと思いますが、このところ減っているように思います。それとは関係なく、一期生から始まってもう何期生目か忘れてしまった皆さんの来訪を期待しています。りっぱな修論や卒論で名を残した先輩が、こんなヤツかと後輩に知らしめるのも時によいのではないのでしょうか。初心に戻るためにも。お待ちしております。お元気で。

建設工学系

平成4年1月からの系内の動きをお知らせします。平成4年3月に環境大講座の石原安雄教授が定年退官されました。先生はわずか2年の短い間でしたが、すばらしいバランス感覚をお持ちで、とかく硬直しがちの大学に新風を吹き込まれ、多くの貢献と教訓を残されました。4月からは滋賀職業訓練短期大学校に校長として赴任されました。同じく3月、構造大講座の新納格教務職員が佐賀大学低平地防災センターに、計画大講座の藤田勝也助手がノートルダム女子大学生活文化学科に転任されました。若い有能なスタッフがいなくなるのは、非常に残念なことですが、新天地での活躍を期待しましょう。同年4月には、計画大講座に西沢泰彦助手が、構造大講座にはLeelawat Chatchai教務職員が新しく本系のスタッフに加わりました。西沢先生のご専門は建築史・技術史で、なんと郷里が豊橋だそうです。Chatchai先生は本学大学院のご出身

松本 博

です。また、5月に事務室の大石哲也さんが用度第2に移動され、代わって学系係の藤木貴章さんがこられました。その他系内の人事関係では、平成3年9月に角徹三先生が教授に昇任され、現在は文部省在外研究員として、米国テキサス大学をはじめとしてヨーロッパ各国の大学、研究所に客員研究員として滞在されておられます。また、平成4年4月に中村俊六先生が教授に、木曾祥秋先生が講師に昇任されました。

授賞関係では、本学名誉教授小林陽太郎先生が平成2年11月に勲三等旭日中授章を受勲され、平成3年1月に豊橋で盛大に祝賀会を催しました。また、小野木重勝先生が平成3年11月に二川本陣の改修、復元に対する貢献で豊橋市文化奨励賞（特別賞）を授賞されました。平成4年4月には山田聖志先生が、シェル構造物の新しい解析手法に関する論文で日本建築学会奨励賞を授賞されました。

以上は、主に人事関係の近況ですが、次に教務関係の近況をお知らせします。現在学生数は、学部164名、大学院修士課程99名、博士課程7名です。工学博士の学位取得者も順調に増え、この春にも、金仁具、金富吉、国井克彦、Hesham Saad Mohamed Ali、張建東、李徹球の6名がめでたく学位を授与されました。

知識情報工学系

周知のように知識情報工学系が発足したのは比較的最近の事です。そのため、現在の最高学年は博士課程前期第二学年です。もちろん、後期課程に進学した学生はおりません。学部修了後、就職した人がいますが、少人数です。当工学系のスタッフはすでに昨年紹介されています。何を報告しようかと思案している内に、タイミングよく、3年に一度まとめられる「豊橋技術科学大学における教育と研究(4)」の校正刷りが回ってきて、「これだ」と思いました。それに、最近、大澤教授にビッグ・ニュースを伺いました。

日本の大学は、今、疾風怒濤の時代を向かえようとしています。大学の自己評価・大学の自由化などという言葉を同窓生諸君は聞かれたことがあると思います。18歳人口は極端な減少に直面しています。最近、その動きを目にしますが、文部省は大学を研究指向の大学と教育指向の大学に二極化しようとしているようです。これは、名実ともなった真の大学の数を削減し、18歳人口の減少に対応しようとするものであるとの解釈が、特に、私学関係者の間に広がっています。研究費を研究活動の実態に即して有効に分配しようという、一見、合理性をもった施策とも裏腹で、世論に対しても説得力を持っています。いろいろな動きが出てきましたが、それらは、密接に関係した事柄です。われわれの豊橋技術科学大学は何処へ行くのでしょうか。ぼやぼやしていると、大学が潰れかねない時代です。研究と教育が大学の使命であることは、言うまでもありませんが、そのあり方は、この時期、大学の命

今年はバブル経済破綻のついでに就職戦線がかなり厳しくなっております。多少の社会情勢の変動があっても、本学学生の評価が変わらぬよう、卒業生、修了生諸氏の益々のご活躍、ご発展を祈りますと共に、本学に対するご厚誼のほどをよろしく願います。

伊藤嘉房

運を左右する決定的な要因になるかもしれません。限られた資料によるものですが、今年は知識情報工学系における現在の研究活動の状況を、二つのトピックスに絞って、ここに報告します。

先月(8月)、当学系の大澤先生が申請されていた文部省科学研究費補助金、重点領域研究「炭素クラスター」(代表 大澤映二)が認められました。当大学の教官を代表者とする重点領域研究が認められたのは、これが初めてです。地方大学の教官が科研費重点領域の代表者になることは滅多にないことであり、当大学としても画期的な出来事です。全国的な規模の研究グループが大澤教授を代表者として組織され、今後の3年間に、文部省からの10億円近くの科学研究費が動くこととなります。大澤教授と共同研究者のみならず、豊橋技術科学大学にとっても大変にめでたい話です。以前、論文の別刷りを頂くなどして、このような大規模な研究組織が認められる背景について、少しは理解しておりましたが、刷り上がった「教育と研究(4)」のプルーフで、大澤教授の研究の最近の状況を調べてみました。過去3年間の原著論文は29編で、そのうちの英文の論文は24編ありました。英文の論文の掲載紙は大部分国際誌です。ここに紹介するまでもなく、大澤先生は、現代のキーワードの一つといわれているC₆₀の存在を、初めて予言されたことで世界的に有名な化学者です。C₆₀は炭素原子60個のみからなるサッカーボール状の美しい形をした球状多面体分子です。その多面体は12個の正五角形と20個の正六角

形からできています(すなわちサッカーボール)。普遍的に存在する炭素の同素体はダイヤモンドとグラファイトのみであるとわれわれは教えられ、人類は長い間そのように信じてきたのですが、この予言はそれを根底から覆しました。大澤教授の予言は約20年前でしたが、この物質の存在が確認されたのは最近のことです。そして、よくあることですが、一旦、それが確認されると、 C_{60} はその辺に幾らでも存在する物質であることが分かりました。炭素が酸化を抑えられた状態で高温にさらされると、 C_{60} は一定の割合で生成されます。炭素が酸欠高温にさらされるような事は、炭素がありふれた元素であるだけに、何時もその辺で起きています。燃え盛る炎の内部の還元炎もその様な状態になっています。それゆえ、 C_{60} は普遍的な物質です。 C_{60} には物理的に高温超伝導をしめし、化学的には、構造状必然的に多くの二重結合を持ち(クイズ： C_{60} の2重結合の数は?—10秒以内に答えて下さい)、反応性に富んだ興味ある物質とのことですが、こういうことは素人の私を書くまでもなく、多くの同窓生諸君は、新聞・雑誌などにより、すでにご存じだろうと思います。大澤教授の研究の内容についても、分野を異にする私が正確に紹介するのは少々無理です。原著論文の題名に C_{60} and C_{70} Clusters, Giant molecules, Conformal Analysis, Cycloalkane, Orbital Calculation, Extension of K-Equation, Quantum など言葉が見られるので、見当をつけて下さい。研究のスペクトルの広さ・深さは論文のタイトルを眺めて、私にもある程度見当がつかます。詳しくは「研究と教育(4)」を手がかりに、大澤教授の原著論文・総説・著書を参照してください。総説・著書には、 C_{60} の存在の予言・発見・研究の発展のドラマが、当事者でない絶対には書けない生き生きとした筆致で、印象的に、描かれたものが含まれています。

当学系のスタッフ全体の活躍の状況は如何でしょうか。同僚の活躍ぶりを知るのには、常に楽しく、自分の励みにもなるものです。「教育と研究(4)」には本学

スタッフによる過去3年間の業績が掲載されています。原著論文・総説・著書・特許のタイトルや掲載雑誌などが、系ごとにまとめられています。そのうち、当学系に関する部分の統計を紹介します。この3年間に出版された当学系のスタッフ20名による原著論文は合計延べ151編、そのうち欧文の論文は延べ112編です。「延べ」は共著論文を重複して数えている場合があるからです。一人当たり7.6編(そのうち欧文5.6編)です。以下、「延べ」を省略します。総説は46編(そのうち欧文6編)。著書は26編(そのうち欧文7編)となっています。特許は0件でした。分類は「教育と研究(4)」の記載に従っていますが、原著論文には、学会のproceedingも含まれています。論文の数が最も多いのは上記の大澤教授で、繰り返しますが、29編(そのうち欧文25編)です。共著論文を共著者の数で割って合計すると、最も多いのはS教授で12.7編(そのうち欧文12.3編)です。両教授の原著論文の、それぞれの意味における多さは抜きんでいます。単純合計で次に多いのがY助教授で23編(そのうち欧文5編)、それに続くF助教授とM助教授のそれぞれ11編はすべて欧文です。さらにT助教授の9編(そのうち欧文8編)、S講師の8編(そのうち欧文7編)と続きます。系組織の活性度の第一近似としては論文の数が最も便利と思われませんが、個人については、お互いのはげみとなるようpositiveな面だけ一部紹介しました。個人の論文の数は分野・研究方法により、相当の開き(20倍以上の開きであることは確実)があり、置かれた立場によっては、一定の期間、論文をまとめる時間が無いということもあり得ることであります。共同研究によって能率を上げるのは推奨すべきことなのですが、その場合、論文の数は増えます。しかし論文の数の単純和に問題があるのと同様に、単純に共著者の数で割ることに問題があります。常に、指導的役割を果たしている人の場合、この操作は過小評価につながります。共著論文は実態に即してカウントする必要があります。個人の論文の数には、時間的ばらつき

があり、内容・実態も一様ではないので、もっと長期間にわたる資料と詳細な内容と各論文において本人が果たした役割などを総合して、はじめて意味がある情報となります。他方、randomnessが平均化される系全体の統計には、それが数値のようなものであっても意味があると思われまます。「教育と研究(4)」には、もっと詳しい情報が含まれているので利用して下さい。さらに、その情報から原著などにたどり着いて、分野が違う人にも、それなりに読んで頂けるなら、これはお互いの理解になるわけですから、大いに推奨されるべきことでしょう。

● 本学の教授を代表者とする重点領域研究が認められたというのは、本学にとって、この時期、明るいニュースです。知識情報工学系の統計値ですが、これが工学部としてどの程度のものか、物指をもっていないので、私にはよくは分かりませんでした。聞くところ

人文・社会工学系

同窓生の皆さん、御活躍のことと思います。人文・社会工学系の教官の近況をお知らせします。

● 浜島先生が4月から一年間の予定でドイツのレーゲンスブルク大学の語学教育研究員及び日本語講師として留学中です。それ以外は皆がそれぞれ一オずつ完成の域に近付いたことを除いては変わりはありません。

以下が現在の担当科目別のティーチング・スタッフ総勢22名です。

歴史学：大久間

国語：山内

によると、豊橋技術科学大学は、全論文数でも、国際学術誌掲載の論文数でも、それをスタッフの人数で割った場合、日本全国の工学部のなかでトップレベルにあるとのこと。頼もしい話です。しかし、これを国際的なレベルと比較するとどうなるのでしょうか。どなたか、調べて頂けませんか。研究に国籍はないわけですから、比較するなら、国際的に比較しないとあまり意味はないという考え方もあります。今後、当大学の研究教育環境が学術先進国並に整備され、教育研究業績がさらに向上し、豊橋技術科学大学が、プリンストン大学のように、小さくても世界の超一流大学に、発展することを願ってやみません。欧米学術先進国で活躍している数多くの研究者と対等な条件下で仕事を競い合える日が近いことを願いつつ、同窓生諸君とともに頑張りたいと思います。

尾 碕 一 志

日本語：河合、村松 ドイツ語：浜島、山本

フランス語：小杉 保健体育：寺沢、安田

英語：伊藤、大呂、尾碕、加藤、野村、野沢、

西村、マーシャル

生物学：シディキ、安田

経済学：朝日、鈴木、氷鉦

なお学系長は寺沢先生、系長補佐は野村先生です。

皆様の更なる御活躍をお祈りします。

退官教官より

平成3年度

私の技科大生活心象風景

※この原稿は、大学の協力により「天伯」から転載したものです。

第3（電気・電子）工学系 教授
榎本茂正



梅の花が綻び、研究室のカレンダーがいよいよ3月になりました。停年退官の日を目前にして、長い旅の終りに仲間から離れ、独り乗物から降りてゆくときの様な心残りや安堵との交錯した複雑な気持ちであります。想えば、初

代学長榊米一郎先生からのお話で昭和53年春、創設期の本学に赴任しましたが、まことに歳月は人を待たず、夢のように14年間を終ろうとしています。大学を卒業した後、工業技術院名古屋工業技術試験所11年、日本原子力研究所15年に続く3度目の勤めでしたが、活気溢れる教職員、素朴な学生諸君との生活に年月の過ぎるのも忘れ、停年の日を迎えるに至りました。研究室で苦楽を共にした卒業生が立派な社会人として活躍している姿を見聞きすると、この年月の重みを改めて感じます。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず…中国の古い詩が心に沁みます。

豊橋へ来て一年後に建てた西の原の自宅から大学までバス通勤しました。朝夕のバスは市内へ向う通勤客とは逆コースなのでゆったり座ることができ、お蔭で短い時間ですが、諸先生と時の話題を取り上げて雑談を交す機会も多く、私の技科大生活の心象風景を彩ってきました。毎春、バス通勤族の何人かの先生方が停年で去ってゆかれ、そして私の順番が巡ってきたという形です。昭和63年夏急逝された富田弘先生も一緒に停年を迎える筈でした。苦しい戦中・戦後時代に生きた同じ想い出が互にベースにあり、バス通勤での先生との雑談は楽しく有意義なものでした。大学のこと、学生のことを熟っぽく、そして社会文化学者らしい見解を添えて語られていた面影は、語学センター南側の記念樹の根元の銘板に刻まれている *Kein Mensch muß müssen!* (人間には自由意志がある) という言葉と二重写しになって甦ってきます。

大学へ移る話が決ってから、大学教師としての期待と不安から「現代大学白書(大学よどこえゆく)」雄渾

社(昭50)という本を水戸の街で購入し、ひそかに読みました。その中の“大学教授の一生”という章に大学教授グリット(グリットとは格子の意味)というのがあります。これは9×9コマの2次元格子の横軸に大学(内部→外部)への貢献度、縦軸に専攻学問に対する研究時間の多少をとり、全体を81コマの格子に分類したものです。格子の四隅が、(1・1)政治家型、(1・9)教育者型、(9・1)タレント型、そして(9・9)学者型と命名し、大学の負わされている4つの使命：大学行政、教育、啓蒙、研究と対応させています。大学教授たるもの、この四隅のいずれかに到達することを目標として励むことが肝要、大学はそのような人材を必要としているというのです。四隅から最も離れている(5・5)サラリーマン型はバランスは良いが評価が低いとあり、何となく大学の厳しさを予感させられました。このグリットはいわば判り易い自己評価に使えます。どのような方向に関心を持ち、労力を費してきたか、そして今、どういう状況にあるのかといった2次元の軌跡を追跡することになります。

私の研究分野は昭和20年代末頃から工業における放射線計測利用でした。職場が変わるとともに研究の対象、内容、規模等も次第に変化し、その間様々な経験をしました。国内、海外に多くの同業の専門家の知人を得ました。技科大では学内の放射線安全管理、そして中部地方では産業界への放射線利用普及に多少なりともお役に立てたと思っております。学生教育の場では、電子応用計測のカテゴリーの中で私の専門を生かし得たことは何よりの幸いでした。前述のグリットに当てはめてみれば(8・7)位でしょうか。自分のことになると、正直のところよく判りません。

最後に一言。私は3歳のとき患った小児まひ(ポリオ)のため左下肢に障害があり、子供の頃から松葉杖を使用しております。このため、様々な形で職場の方々から援けていただき、無事人並みに停年の日を迎えることが出来ました。深く感謝し、お礼を申し上げます。

「上げ潮に乗って」

第3（電気・電子）工学系 教授

野 口 精一郎



1951年に私は東京工大の応用物理を卒業した。

その年に都立大学理学部物理学科に就職することが出来た。指導教授であられた高木豊先生のお口添えによる。都立大には夜間部もあって、新米の助手の私よりも年長の学生も在学した。新設の学部なので、実験設備もほとんど無く、必要な装置の大部分は自作しなければならなかった。文献もそろっていなかったから、他の大学等へ出掛けて、必要な部分はノートへ書き写した。指にタコができたが、内容を理解する助けには大いになった。現在のように、参考になるかもしれないと思った文献は何でも取り敢えずコピーしておくという風潮は、本当に研究に役立つのだろうか、と不安になる。

何しろ、敗戦で国力を消耗し尽してから、まだ6年しか経っていない時である。外国からの文献がマブシク見えたものだ。そのような状況で研究、ことに実験を主体とする研究は大きなハンディキャップを背負っていた。あの時代を顧みると、データを採るには主としてメーターを目で監視し日盛りを読み取り、ノートへ手で書き取るという方法が用いられた。現在は、試料を装置にセットしたら、あとはデータをプリントアウトさせるだけ、グラフも機械が描いてくれる。研究者の仕事は、何を研究するかを決め、そのための計画を立て、実行のための資金と人を集めることになる。昔は実験しながら試料との直接の対話ができたのに、今は中間にデータ処理装置が介在して試料の言い分を取り次いでくれる。自然の発している情報の機微を発見し損なうことも起こり得る。現代の研究者は昔より数段も賢く、自然の声に耳を傾けなければ、いくら高価な装置を持っていても2番煎じの研究しか出来ない。

40年あまり、研究に従事してきた者にとって、敗戦直後の全く貧しかった時代から、日本の国力の上昇に伴って、現在までほとんど一本調子で研究環境も改善されてきた。私自身もその恩恵を受けて、研究の幅を広げてきた。まさに〈上げ潮に乗って〉である。

私の興味の中心は一貫して物体の中の電子のハタラクであった。対象とした物体として、最初は金属・合金、次は金属液体・非晶質、ついで超微粒子、最近では超伝導体である。これらの研究を行うにあたって、私

を指導して下さった方々、協力と励ましを与えて下さった方々、そして、さらに研究を共にした多くの学生諸君のことを今思い出して、私が潮に沈まずに上げ潮に乗って来ることが出来たのは、このような多くの方々による恩恵の賜物であると感謝している。

この50年間における科学・技術の発展は、人類の歴史の上で未曾有のもので、数百万年に渡る進歩の総量を、はるかに、遙かに上回るものである。原子エネルギーの利用、半導体技術の確立によるコンピュータの魔術的な進歩と、それを利用した情報科学の誕生と短期間における見覚ましい成長、最近注目を浴びている高温超伝導は21世紀に花開く革新的技術として期待されている。あたかも、倍倍ゲームで進歩してきたようだ。科学・技術の恐ろしいまでの進歩に対比して、他の面における人間の知恵は2千年も前のギリシャ時代と殆んど変わっていないのではないかと思う。このアンバランスは、マンモスの牙のように、大きくなり過ぎた科学・技術が人類そのものを滅亡に追い込むという悪夢を生む。はたして杞憂と笑いとばしていいものだろうか。

科学・技術を人間の知恵の一部として、総合的な研究と教育を行うことが人類の生存にとって最も基本的な問題であると思うし、それが大学をはじめとする高等教育機関の役割であろう。技術科学大学といえども技術科学だけ教えていれば、それで十分という時代ではなくなった。賢明なる諸兄は先刻ご承知とは知りながら、教育の面でも学生諸君の関心を広げていただきたいと願っている。

教育は人間社会にとって最も大切であるにもかかわらず、直接の金儲けに比べて、必ずしも重視されてきたとは言えない。最近の10年間国大協の調査によれば国立大学の予算は殆んど横ばいであり、教官一人当たりの研究費は減少の一途をたどっている。この期間における大学院学生の増加によって、教官プラス大学院生当たりの研究費の減少は、さらに著しい。入学検定料、授業料など学生の負担が確実に増しているにも拘らず、である。しかも、この10年間は日本経済が空前の好況を示したことを考慮すれば、このような教育の停滞は不可解である。困難な問題の山積する未来と、教育に対する無理解の中で、切に諸兄のご健闘をお祈りする。

退官にあたって

第6 (建設) 工学系 教授

石原 安雄



大学卒業後、旧制大学院で3年を過したのち、神戸大学工学部に約6年、京都大学防災研究所に31年、そして本学に2年と、合計39年間を大学教官として勤務し、それぞれに特長ある学風の中で教育と研究に従事できたことは私にとってこのうえもない幸せでありました。旧制の工専を改組して設立された神戸大学工学部では教官も学生も新しい大学としての学風づくりに懸命でありました。京都大学防災研究所では、伝統ある学風の中で防災という目標をかかげた研究をいかに行うかを悩みつつ研究と学生指導を行ったのであります。本学では、これらの大学とは異った構想で組織されたことをふまえ、僅か2年間ではありましたが、教育に研究に楽しくかつ有意義に過すことができましたが、このことは学長先生はじめ諸先生方、事務部の方々、そして学生諸君のご支援の賜物と深く感謝致しております。退官致しますに際して、僭越ながら提言らしきことを申し上げて御礼申し上げます。

豊橋技術科学大学十年史には、計画の当初本学は、「新しい技術対象に対し常に適応能力を備えた意欲的研究者や指導的技術者の養成が急務である」という強い社会的要請に対応するために、「実践的技術の開発を主眼とする教育及び研究を目的とする特色ある大学院レベルの高等教育機関」、具体的には「高等専門学校卒業生及びこれと同等以上の技術、学力を有するものを受け入れて教育を施す」ことを基本構想とした「技術科学大学院」であったと記されております。しかし、昭和53年の学生受入れ時には、学校教育法にしばられて、見かけは一般大学、実質は高専の延長というように変貌したとも記されております。

一般に、組織というものは初めは設立の趣旨に沿って活発に運営されますが、年月がたつと規則に沿うような方向に流れていくものでございます。上記したように、本学は建学の精神にそぐわない形の一般大学の形式で組織されていますので、現在そうなっているというわけではありませんが、実質的に一般大学と同じように運営されるようになる危険性があります。

近年、文部省に設けられた大学審議会は、「大学等における教育研究の高度化、個性化及び活性化等のための具体的方策について」の諮問をうけて、大学院制度の弾力化を始めとする10件の答申を行っています。これをうけ、また大学独自で、現在の大学院を主体とするような教育、研究のあり方が真剣に検討されており、一部実行されるやに聞いております。このことは、ますます深遠化する学問と高度化する技術、並びに国際化と社会の要請によるものでありまして、これからの必然的な動向であると考えられます。

また、最近では高専から一般大学への編入者が急増しており、さらに高専が独自の専攻科をもつようになったと聞いております。

これらのことを総合的に勘案しますと、当初志向されていた「技術科学大学院」ということを再考する必要があると考えるものであります。講座制を基本としている総合大学では、大学院の存立する基調は、「あくまで学術研究の推進によって、いわゆる往聖のために絶学を継ぐべき研究者の養成におかれており、その中であって大学及び研究科の自主性のもとで、社会の多様な要請に対応しうる枠組を構築するという発想が、あらゆる大学院制度の改革において必要である」(京大公報No.372別冊)としており、制度の改革はかなり難しいように思われます。これに対して本学は、当初「技術科学大学院」を志向していたわけで、今日の社会の要請に適合した大学院大学に発展することは、法規の問題は別として、そんなに難しくないように思われます。

いうまでもありませんが、先生方の研究業績は学会等で高く評価されており、産業界との交流も盛んであります。さらに強調すべきは卒業生の優秀さであります。就職先はわが国のどの大学にも引けを取らないほど優良企業で、かつ職場での評価が高いことも周知の事実であります。こうした実績をもち、大学院制度の弾力化と整備拡充という社会的要請に対応するために、本学の教官も学生も大学院が本籍だという体制に進み、教育及び研究を飛躍的に進展されることを望むものであります。

— 12 —

転任教官より

光陰矢の如し

第4(情報)工学系 教授

秋 丸 春 夫



本学に着任して以来、早くも15年目になりました。月並みな言葉ですが正に光陰矢の如く、あっという間に過ぎ去った感じです。この間を振り返り、思いつくままにトピックスを拾いながら所感を述べさせて戴きます。

開学の前年から八町通りの仮事務所や商工会議所その他に、入試やカリキュラム打ち合せ等で集まっていました。1978年1月に勤労福祉会館で就任教官の顔合せがあり、その年の4月に着任した時は、現在のA、B棟と福利棟だけが瓦礫のころがるキャンパスにポツンと建っていました。そして、雲雀のさえずりを聴きながら、一体これからどうなるのだろうと途方に暮れたのが、つい昨日のように思い出されます。それでも、新入生を迎えて教官も学生も創造的で実践的な教育と研究を合言葉に、新しい大学の創設に向かって意気に燃え奮戦を続けました。

やがて、学年進行により修士課程が設置され、大学院大学としての形態が備わってきました。しかし、実務訓練(当初は修士1年次に実施)のため、企業出身の教官らがコネを頼りに受け入れ方を願って回りましたが、時には私立の工科短大と間違われることもありました。それほど当時は知名度がなく、昨今のような企業からの熱い眼差しなど到底想像することもできませんでした。

本学の創設の憲法である「青表紙」には将来博士課程の設置についても計画するとうたってあり、それを目指して全学一丸となって努力が続けられました。1984年に当時の総理大臣が本学を視察されたときの座談会で、ある学生が「早く博士課程を作らないと、よい先生がいなくなります。」と発言したのに対して、首相は「これは日本のMITになる、こんな立派な大学に博士課程ができない筈は無い。」と答えました。それが効いたかどうか、1986年には念願の博士課程が設置され、名実ともに一流大学となりました。

この間、技術開発センターを始め学内の共同利用施設が逐次整備され、学内外の活動が活発化して軌道に乗り、1988年には最後に残った情報処理センターも完成しました。これは、マルチベンダ環境でネット

ワーク指向の先進的なシステムとして、情報処理センターの新しいパラダイムを提供しました。その創設に関係した一人として誇りとするとともに、省令設置センターへの昇格が待たれます。

最近の数年間には特に充実したものでした。博士課程をはじめ優れた学生やスタッフに恵まれ、教育と研究に全力投球することができました。国際会議、関連学会の大会、研究会などを本学で開催し、知名度を高めることに努めました。外国からも多数の研究者が訪れるようになり、学生の国際感覚の養成にも役立ちました。このような学会活動や対外活動を活発に行なう原動力として、多数の優れた大学院学生の存在は本学の至宝であることを改めて感ずる次第です。そのレベルの維持向上が本学の死命を制するといっても過言では無いでしょう。

これからは就学人口が減少し、大学が如何に生き残れるかの時代だと言われています。大綱化により、それぞれの大学が個性を発揮し、魅力的な大学として発展することが大きな課題であります。入試対策委員会の一員として、本学のレベルアップ戦略に参画できました。偏差値など受験産業に振り回される面もありますが、大学のイメージに対する波及効果は無視できないものがあります。一時の破局的な状態から脱出して今や上昇状態になってきました。孫氏の兵法に「よく戦うものは、これを勢いに求めて兵に責めず。」とあります。この勢いに乗って飛躍することが期待されます。また、将来計画の一貫として基盤整備に関する答申を出しましたが、その実現も一つの鍵となりましょう。

前任のNTTに28年間、本学にその半分を勤めることができ、この間、企業と大学の両方の体験ができたことは誠に幸せでありました。今後は、これらの経験を生かして朝日大学(経営学部)において教育と研究を続けるとともに、情報ネット研究所(東京、豊橋、モントリオール)において、情報工学と社会科学、人文科学との学際的な分野について、情報化社会の発展のため世の中にお役にたてれば幸いです。

長い間お世話になり誠に有難うございました。本学の一層のご発展と、皆様の益々のご健勝を祈念いたします。

* 同窓生がお世話になった方々より *

D棟7階事務室で得たもの

会計課 清水 由起子

ひばりヶ丘で一番高いところにあるオフィスそれがD棟7階建設工学系の事務室です。私は、そこでその素晴らしい眺めと共に、昭和56年4月から昭和61年4月までの5年1か月の間勤務させていただきました。

建設工学系の1期生から11期生（1年次入学生）までのたくさんの学生さんとのふれあいがぎっしり詰まった、私の大事な玉手箱それがD棟7階なのです。

私がそこで得たもの、それは大きく分けて、次の2つのことです。

“新しい大学を目指せ”

私が昭和53年に豊橋技術科学大学に就職してきて、まず驚いたのが、その課程のネーミングでした。従来の機械、電気、金属、化学、土木及び建築ではなく、エネルギー、生産システムそして物質工学など新しい響きにうつつらと新構想大学を感じたものでした。しかしながら、“建設工学”については、豊橋が建築、長岡が土木と以前から聞いていたため、長岡と合わせるための名称で、内容については、建築学科なのでであろうと思っていたわけです。ところが、昭和56年に、系事務室が新設され建設工学系の事務室に、一歩足を踏み入れた途端、それが誤りであり、ここの新しい建設工学課程への産みの苦しみを目の当たりにし、愕然としました。

D棟7階建設工学系事務室の隣に、通称“サロン”と呼ばれる、教官、学生そして私のような事務の者も“輪（和）”になって話せるすばらしいスペースがあります。そこで、ひざを交え、目と目で火花を散らしながら、建築学とは、土木工学とは、環境工学とは、そして、建設工学とは……自ら進むべき目標を暗中模索し語り合う姿に触れた時、その真摯さに心打たれました。そして、自分なりに新しい学問領域“建設工学”について考えるきっかけとなりました。

新しい大学、今までの固定観念に捕らわれない学際的な領域、新しい課程。そこで得た経験は、次のステップ知識工学課程、エコロジー工学課程の新設など新

しい名称への理解へ役立つこととなりました。

“大学人への認識を持って”

私が最初に配属されたのは、会計課でした。昭和53年度は、講義棟に事務局が間借りしており、学生さんや先生方が身近に感じられましたが、昭和54年度になり現在の事務局に移ってからは、事務局の中ですべての仕事が完結しているような錯覚をしてしまいました。

ところが、建設工学系の事務室に配転となり、大学とは、教官、学生、事務局の3位1対で初めて、大学として成り立つ。事務局が、大学を動かしているわけではない。ということが、身に沁みてわかりました。そして、大学で、仕事をするに当たり、自分のできることは何か、今、自分がやるべきことは何かを、問い続けた5年1か月でした。そして、その考え方が、事務局に戻った時非常に役立ちました。仕事をする時、これはどこに何のために出すのか自分が作った資料は、どこで役立つことができるか、……たった1人の小さな存在でしかありませんが、私は、大学にいるすべての事務の人がそういう気持ちを持ち続けることが、この小さな愛すべき豊橋技術科学大学の生き残りへの道につながるのではないかと信じています。

豊橋技術科学大学もひばりが丘で開校し15年目を迎え、知識情報系研究棟群、ゴルフ練習場、プールもでき、どんどん変わっていきます。でもD棟7階事務室から見える夕陽は、今日も変わらず美しく、白い建物をオレンジ色に染めています

この美しいひばりが丘のD棟7階で得たことをこれからも忘れぬよう頑張っていきたいと思います。

皆さんのご活躍を祈りながら、ペンを置くことにします。

芳しい? 「豚風」 今だに……

福利厚生棟理容室 三浦靖男

卒業生の皆様、その後如何お過ごしでしょうか。私がこの技科大で理容の仕事に携わるようになって、早5年の月日が過ぎようとしています。この間に思い出深い色々な出来事、そして何よりも忘れ難い多くの人々との出会いがありました。時折、社会人になられた皆さんが「仕事で近くまで来たから寄らせてもらいました」などと言って顔を見せてくれるのが楽しみです。思い起こせば5年前、初めて技科大の土を踏みしめた時には正直なところ、「どうなる事やら」と脳裏を一抹の不安が過ってゆきました。何と言っても、まず出迎えてくれたのが、冬の強い風と、あの芳しき「豚風」、特に春先の一番強烈な時期でしたから、それまで思い描いていた技科大のイメージが音を立てて崩れていったとしても仕方ありません。しかし、月日の流れとは恐ろしいもので、一年、二年と技科大での生活に慣れてくるにつれて、この「豚風」より季節の移り変わりを感じるようになり、ついに今では「豚風」から

明日の天気を気象庁の予報よりも高い確率で言い当てる事が出来るようになりました。そして、技科大で仕事を始める私の気分を重くしていた最も大きな要因とは「噂では、この学校に通う生徒さんは大層まじめで優秀らしいから、もしかしたら気難しい人ばかりで私のセールスポイント? の毒舌とジョークも通じないのでは」というものでした。しかしこれは自己満足でも呆気なく取り返し苦労だった事が判明し、それからたくさんの気さくで愉快な人々と出会い現在に至っています。振り返ってみればあつという間に過ぎた5年間でしたが、技大祭で金魚を飲み込んでビデオデッキを獲得した学生さん、懐かしい顔が次々と思い出され、無性に会いたくなくなりました。ですから、こちらに来る機会がありましたら気軽に理容室に立ち寄って、近況でも聞かせて下さい。最後になりましたが、皆様の一層のご活躍をお祈りします。

求む 投稿・表紙!!

■ 表紙

写真、絵、グラフィックデザイン等何でもOK!

・サイズ:B5版程度に縮小、拡大可能なもの。

※CM的な要素のものを除く。

採用の場合は薄謝を送付致します。

■ 投稿

23字/行 横書き 厳守

その他:内容・長さ等は問いません。写真も添えていただければ幸いです。

随時、受け付けますので下記まで送付下さい。

〒441 豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1

豊橋技術科学大学内

／

同窓会事務局

同窓会誌

編集係

■ 会員からの一言

同窓会では会員の皆さんからの原稿を常時募集しておりますが、執筆するとなると、それなりの内容とある程度の長さが必要であるということ、ついついかしこまってしまうのではないのでしょうか。そこでもっと気楽に投稿していただけるように、新たに「会員からの一言」というコーナーを次号から設けたいと思います。「結婚しました」とか「?月?日OB会開催」といった簡単な近況報告や連絡事項など、内容、長さは問いません。住所変更の通知や会費振替用紙の通信欄にでも結構ですし、もちろん葉書、封書で直接送っていただければ大歓迎。原則としてすべて掲載する予定ですので、どしどしお寄せください。投稿の際には、お名前、卒業あるいは修了年度、学科名をお忘れなく!

「頼まれた原稿は 今すぐポストへ」

編集委員会からのお願いです。

研究室だより

「魁！ システム解析研究室」

研究室一同

我々の研究室の所在地はD3棟4階です。デスクルームは南北に2部屋ありますが、南にはうるさく落ちつきのない人たち、北には比較的静かな人たちが生息しています。人間は環境に適応するもので、うるさかった人でも北側の部屋に移動すると不思議と静かな人になってしまうようです。研究室のメンバーは御存知、西村先生を筆頭として、小野木先生、竹村先生、橋爪先生とDが1人、M2が7人、M1が8人、B4が7人の27人より構成されています。

研究室の特徴としては、(1) なぜだかわからないがソフトボールがやたらに強い(ちなみに2系の大会では破竹の2連覇をなし遂げた)。(2) おまけに軟式野球もなかなか強い(2系の早朝野球大会では2年連続2位の実績がある)。(3) 2系のB4で唯一存在する女子学生がいる。(4) 酒豪が多い。よく夜中に現れては研究室のオープンで、酒菜として秋刀魚やタラコを焼く学生がいる。(5) コンピュータに向って話しかける人が約5名ほどいる。(6) イベントごとが大好きで、なにかと理由をつけx飲($x \in \{鯨, 牛, 痛, 適\}$)する。……などが挙げられます。

このような特徴を見ると、研究の方は本当に進んでいるのだろうかと思われの方がほとんどだと思いますが、その点はもちろん、それこそが学生の本

分、

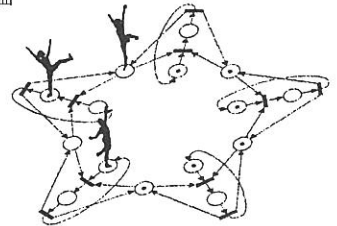
遊ぶときは遊ぶ、やるときはやる

これがこの研究室のスタイルだと思います。何故このようなスタイルになったのでしょうか？それは、多分、我々の研究は机上で理論を展開することが多く、理論の裏付けとしてもコンピューター上のシミュレーションによることがほとんどであるため、比較的自由に研究時間を組める点にあると思います。他の研究室の人達からは「苦勞知らず」と言われますが、実は集中的に(苦勞)を負っているのです。では、実際どのような研究をしているかといえば、

離散事象系の設計・制御

- ・生産システムのスケジューリング
- ・多変数制御系の設計と解析
- ・並列システムの解析
- ・列車ダイヤの評価

などのテーマで現在研究を進めています。そして、秋の深まるのとともに研究室のコンピュータをフル稼働させる日々が始まります。



2系ソフトボール大会優勝 (H4.6)



伊良湖岬サイクリング (H2.11)

「阿部研日記、徒然なるままに……」

情報工学専攻 M1 石原敏充

突然この原稿を書くようにと指令がきた。私がおちやらけた文章しか書けない事を知らないのであろう。(真面目な文章を書こうとすると頭がスパークしてしまうのである。)従って、以下の文章はおもしろくするために多少誇張した表現があるかもしれないことを初めに断っておくことにしよう。

「研究室だより」ということなので、私が阿部研に入ってから1年半にあった事を日記風につづってみようと思う。〔同窓生の方々に、“我が～研究室は……”などと研究内容等を書いて仕様がなくてであろう。(とかいいながら、自分が楽をしたいだけという話もある。)]

平成3年4月

今日から阿部研が我々の研究室となる。なんでも阿部研には、“月に最低一回は飲み会をする”というノルマがあるそう。これは、阿部先生が月に一回飲み会がないと怒るからだそう。恐るべし！阿部先生！！我々に明日はあるのか！?

以下次号!! (ウソ)

平成3年7月

今年初めて、“阿部研夏の合宿”をすることとなった。合宿とは名ばかりで、実際は“みんなで海に遊びに行こう!”という目的がこの裏にはあった。場所は御前崎に決定！そう、ガイキングの基地が、いやもとい、燈台のあるあそこである。(うっ。ガイキングなんて知っている人がるのだろうか?)ここで改めて先生の酒呑みぶりを知ることとなる。前日の夜に飲んで、朝起きた時の第一声が「おっ！ウイスキーまだのこってるじゃん」である。(しかも、まじに飲むのである。)これには流石にまいった。正に恐るべし！阿部先生！！我々に明日は無い。先生がどうやらここを気に入ってしまい、なんだか来年も行く事になりそうだ。

平成3年10月

芋煮会というのをやる。毎年やっているそうだ。“いもにかい”とは何かと聞くと“芋煮会”だと言われた。これをして、みんな“My Mather”いやいや“我がママ→わがママ”だというのが良くわかった。味噌は白がいいだの赤がいいだの言うわ、ビールはモルツがいいだの吟○込みは嫌だの、もう言いたい放題。結局、当り障りの無いよう、味噌はミックス、ビールは

あらゆる種類のものを買っていくことにした。

平成3年12月

今年ももう終りである。と言うわけで忘年会。毎年、“忘年会は贅沢に”をモットーとしてやっているとの事。今までに、しゃぶしゃぶやカニづくし等は食べたので他のものにしろとお達しが。でも流石にフグやスッポンには手が出ない。代わりに足が出てしまう。仕方がないので鴨なべで我慢してもらおう。やっぱり冬は“なべに日本酒”である。と先生が言って……ない。

平成4年4月

今までM2だった人達が去り、阿部研にも新しくB4が入って来た。というわけで新歓である。M2だった人達が白酒呑みで、その人達がいなくなった事により、たくさん酒を呑む人が少なくなった。新B4に期待していたのだが、旧M2ほどではない。その為、先生の後ろ姿がちょっぴり寂しそう。がんばれ、先生！まけるな、先生！！みんなが応援しているぞ！！

平成4年7月

今年もやはり、夏の合宿で御前崎に行くこととなった。なんだか毎年恒例になりそうである。ドクターのH氏がいろいろとボカをしたので、砂にうめて顔から下をドラえもんTMに造形する。これを“ハラエもん”と名付ける。(うっ。H氏とした意味がないぞ!)今回は先生の名言を聞くことができなかつた。ちょっぴり残念。

ひとまず、これで“阿部研日記・前編”は終りである。なんだか“阿部研酒呑み日記”みたいになってしまったが、呑んで遊んでばかりいるわけでは無い事をここで断っておく。

なんだか、とつてもいけない事を書いた気がする。これでは私の修了が危ぶまれるので、この日記はフィクションであり、実在の研究室・人物とはまったく関係がありません。と書いておこう。

「何を書いてるんだ。」

「あっ！先生！」

「どれどれ……」

「(まずいっ!)」

「……君、修了できるといいねえ。」

「ガン!!」

「当世加藤研究室事情」

システム情報工学専攻 2年

柴田良一

昨今、私も学年が上がるにつれて、周りにももの言うことが多くなってきました。このような研究室紹介を書くのもその一例ですが、あまり肩肘張らずにつれづれなるままに書いてみたいと思います。

現在研究室は大所帯となっています。日頃活動とともにしているのは、加藤先生をはじめ山田先生（平成2年、東北大学より着任）、草間先生（平成3年、豊田工業高等専門学校より着任）、高島先生（平成2年、本学博士課程より着任）の4名の教官と、学生が24名（博士課程2名、修士課程10名、学部12名）です。さすがにこれだけ学生がいると4部屋を使っても窮屈な感じがあり、さらにワークステーション5台と端末10台、プリンタ6台、その他諸々の周辺機器を並べるとその居住環境は年々厳しいものになってきています。（そのしわ寄せは学部4年に来ているのかも？）

総勢30名近くのグループのため、研究テーマも多岐に渡っています。大まかに対象を分類して見ても、単層ラチスドーム、RCシェル、歴史的構造物、張弦梁構造、地盤、橋梁、格納容器等があります。さらに、それぞれの構造物に対して、数値解析を基本として、応力解析、座屈解析、耐力推定、波動伝播、振動解析、実験との比較検討を行っています。最近の新しい展開としては、知識工学的手法の応用、CADシステム、景観設計等が試みられ、今後の発展が期待されています。また、最近では数値解析との比較検討のために実験を行う場合もあり、今年度も6月に単層ラチスドームの耐力試験行ったところでした。また、数値解析に関しては全面的にワークステーションを利用するため、以前のように名大を使うために資料を持って端末室へ行かなくても良くなりました。更に、学内LANに接続された各部屋のワークステーションでは、豊富な計算機

資源を用いて数値解析が分散処理され、研究環境に関しては格段の進歩を遂げています。

現在、これら幅広い研究課題に対して、先生方の指導の下で先輩と後輩が一緒になってグループを作り課題に取り組んでいます。さすがに、これだけの多様な研究からはさまざまな研究成果が出ており、平成4年度の建築学会大会では10編程の梗概を発表する予定です。また、OBの方々には頻繁に研究室に足を運んでいただき、在学生の指導（叱咤激励？）をしていただき、研究活動をより一層活発にしているものと思います。また、外部の方やOBの方を交えた研究会も頻繁に行われるようになり、情報交換の場として、また在学生に対する良い刺激の場として活発になっています。

随分と型苦しい話になってしまったので、この辺で研究室の日頃の雰囲気をお知らせします。研究室の一日は、8時半ごろに早く来る学生が部屋を開けるところから始まります。ぽつぽつと人が集まり始め、先生が来られる10時前になると大体の人が研究を始めだします。（ちなみに完全にマイペースの人もいる？）研究室の空気に緊張が伝わり、先生が各部屋をまわって各学生の様子をみて助言や指導をしてゆきます。午後は慌ただしい雰囲気があふれ、一気に時計は5時半まで進みます。夕食をとったあと、徐にコーヒーを入れてすずろたわいない話が続きます。周りが暗くなり、バイトに行く人、机に戻る人、誘惑に流れる人、様々な展開を見せ、研究室が落ち着きを取り戻してきます。こんな風には書くと、研究室の一日はあつと言う間ですが、その間に頭を振り絞って研究に打ち込んでいる姿を忘れてはいけません。

最後に真面目に研究室を顧みてみます。研究室が始

まっから既に十余年たったそうですが、その間に学生の気質も変わってきたと思います。私はこの研究室に所属して5年目になりますが、この間にも相当の変化がありました。これは何もこの研究室に限ったことではなくて、もっと大きな流れなのかもしれませんが、やはり創設当時の厳しい雰囲気は緩んできているかもしれません。研究室の語り草（伝説？）となっている様々なエピソードは随分と色あせて、昔話に近くなっているようです。段々と愚痴に近くなってきたので、この辺で止めておきます。是非ともOBの方々には研究室を訪ねられ、昔話を聞かせながら懐かしい思い出を蘇らせてはいかがでしょうか。



「最新の研究情報」の発行

本学では、このたび教官の研究成果について、社会への速報性と浸透性併せて公開性の一環として新たに「最新の研究情報」誌を発行しました。

これは、主として産学交流の一助とするため昭和61年度から発行している「教官研究課題一覧」を見直し、充実を図ったものです。

内容は、1人1ページとし、各研究テーマごとに「研究概要」で研究のマクロな意味を、非専門の中間管理職の方にもできる限り分かり易く、「関連文献」で詳細な内容を知り、また「KW」（キーワード）を設け、レベルの深さを知ることができる等、他大学にはない新しい試みで編集しました。

規格は、B5版で136ページ。経費節約のため、各教

官自身で原稿を作成し、ダイレクト印刷によって2,000部を発行しました。今後も毎年発行予定です。

まだ余部がありますので、御希望の方は角3型封筒に返信先を記入、返信用360円切手を貼付し、下記の本学事務担当あて申し込んでください。

なお、本年度版が終了した場合は、少々お待ちいただき来年度版をお送りしますので御承知ください。

「最新の研究情報」申込先：

〒441 豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1

豊橋技術科学大学教務部

研究協力主幹付研究事業係

Tel. 0532 (47) 0111 内線325

平成3年度就職内定先一覧

No	就職先	学部	修士	博士	計
一 般 企 業					
1	アイシン・エイ・ダブリュー(株)	1	1		2
2	アイシン精機(株)		1		1
3	旭化成工業(株)		3		3
4	(株) 梓 設 計		1		1
5	アルプス電気		1		1
6	ア ス モ (株)	1			1
7	アイシン高丘(株)	1			1
8	(株)いすゞ中央研究所		1		1
9	(株) I N A X	1			1
10	石川島播磨重工業(株)		2		2
11	(株)イノアックコーポレーション		1		1
12	ウシオ電機(株)		1		1
13	(株) 植 木 組		1		1
14	宇部短期大学		1		1
15	NTTソフトウェア(株)		1		1
16	NTTデータ通信(株)		1		1
17	NTN東洋ベアリング		1		1
18	(株) N K K		1		1
19	NSKワナー(株)	1			1
20	(株)エフ・ジー・ティ	1			1
21	(株) 大 林 組		3	1	4
22	オムロン(株)	1	1		2
23	沖電気工業(株)		1		1
24	(株) 岡 田 商 事		1		1
25	(株) 奥 村 組	1			1
26	カヤバ工業(株)	1			1
27	川崎重工業(株)		4		4
28	関西電力(株)		1		1
29	花 王 (株)		2		2
30	関西ベイント(株)		1		1
31	鹿 島 建 設 (株)		4		4
32	川研ファインケミカル(株)		1		1
33	キャノン(株)	1	2		3
34	キャノン電子(株)		1		1
35	九州電力(株)	1			1

No	就職先	学部	修士	博士	計
36	九州松下電器(株)	1	1		2
37	九州日本電気(株)	1			1
38	北野建設(株)	1			1
39	(株) ク ボ タ		1		1
40	熊谷組(株)	1	1		2
41	原子燃料工業(株)		1		1
42	KTIセンコンダクター(株)		1		1
43	(株)計画技術研究所		1		1
44	高周波熱錬(株)	1			1
45	(株)神戸製鋼所		4		4
46	(株)コニカケミカル	1			1
47	コンピューターテクノロジー インテグレート(株)		1		1
48	(株) 鴻 池 組		1		1
49	コニカ(株)	1			1
50	(合)三共建築設計事務所		1		1
51	三洋電機(株)	1			1
52	清水建設(株)		1		1
53	昭和アルミニウム(株)		1		1
54	新日本製鐵(株)		4		4
55	信越化学工業(株)		1		1
56	シャープ(株)		1		1
57	新菱冷熱工業(株)			1	1
58	静岡理科大学			1	1
59	(株)資生堂	1	1		2
60	(株)スキャンシステム		1		1
61	スズキ(株)		1		1
62	住友化学工業(株)		2		2
63	住友金属工業(株)		2		2
64	住友重機械工業(株)		1		1
65	椋山女学園大学		1		1
66	セイコーエプソン(株)		2		2
67	積水ハウス(株)		2		2
68	セイコー電子部品(株)		1		1
69	(株) 関 電 工	1			1
70	(株)ゼクセル	1			1
71	ソニー(株)		3		3

No	就職先	学部	修士	博士	計
72	大成建設(株)		2		2
73	(株)竹中工務店		3		3
74	ダイキン工業(株)	1			1
75	大和ハウス工業	1	1		2
76	ダイハツ工業(株)	1			1
77	大同特殊鋼(株)		1		1
78	大日精化工業(株)		1		1
79	第一工業製薬(株)		1		1
80	(株)高木化学研究所		1		1
81	多摩川精機(株)	1			1
82	大豊工業(株)	1			1
83	(株)玉野総合コンサルタント	1			1
84	(株) 中 部	1			1
85	チ ッ ソ (株)		1		1
86	中部電力(株)		3		3
87	中日本建設コンサルタント(株)	1			1
88	中部テレコミュニケーション		1		1
89	中外炉工業(株)	1			1
90	(株) ツ ム ラ	1			1
91	電源開発(株)		1		1
92	(財)電力中央研究所		1		1
93	T H K (株)	1			1
94	テイサン(株)	1			1
95	東北日本電気	1			1
96	(株) 東 芝	2	2		4
97	東邦ガス(株)		2		2
98	東陶機器(株)		2		2
99	東 レ (株)		2		2
100	戸田建設(株)		1		1
101	トヨタ自動車(株)		2		2
102	(株)豊田自動織機製作所		4		4
103	(株)豊田中央研究所		1		1
104	豊田通商(株)	1	1		2
105	同和鋳業(株)		1		1
106	豊田工機(株)		2		2
107	東京ガス		1		1

No	就 職 先	学 部	修 士	博 士	計
108	東 北 電 力 (株)		1		1
109	東 海 カ ー ボ ン		1		1
110	東 急 建 設 (株)		1		1
111	(株) 巴 組 織 工 所		1		1
112	東 洋 キ ャ リ ア 工 業 (株)		1		1
113	東 北 パ イ オ ニ ア (株)		1		1
114	東 海 旅 客 鉄 道 (株)		1		1
115	東 亜 合 成 化 学 工 業 (株)	1			1
116	東 京 通 信 ネットワーク (株)	1			1
117	東 芝 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン テ ク ノ ロ ジ ー (株)	1			1
118	東 芝 ケ ミ カ ル (株)		1		1
119	ナ ト コ ベ イ ン ト (株)			1	1
120	(株) 日 建 設 計		1		1
121	日 東 電 工 (株)		1		1
122	日 本 ガ イ シ (株)		1		1
123	日 本 合 成 ゴ ム (株)	1	2		3
124	日 本 石 油 (株)		1		1
125	日 本 電 装 (株)	1	4		5
126	日 本 電 信 電 話 (株)		5		5
127	日 新 製 鋼 (株)		1		1
128	日 産 自 動 車 (株)		2		2
129	日 本 化 薬 (株)		1		1
130	日 本 板 硝 子		1		1
131	(株) 日 本 製 鋼 所		1		1
132	日 本 車 輛 製 造 (株)		1		1
133	日 電 ア ネ ル バ (株)		1		1
134	日 本 電 気 ホ ー ム エ レ ク ト ロ ニ ッ ク ス (株)	1	1		2
135	日 産 ガ ー ド ラ 触 媒 (株)		1		1
136	日 本 放 送 協 会		1		1
137	(株) 日 水 コ ン			1	1
138	西 松 建 設 (株)	1			1
139	日 本 タイ ム シ ェ ア	1			1
140	(株) 野 村 総 合 研 究 所		1		1
141	パ イ オ ニ ア (株)		1		1
142	伯 東 (株)	1			1
143	(株) 日 立 製 作 所		8		8

No	就 職 先	学 部	修 士	博 士	計
144	日 立 電 線 (株)		1		1
145	日 立 金 属 (株)		1		1
146	ヒ ュ ー テ ッ ク		1		1
147	東 日 本 旅 客 鉄 道 (株)		1		1
148	日 立 計 測 サ ー ビ ス (株)	1			1
149	(株) 日 立 ビ ル シ ス テ ム サ ー ビ ス	1			1
150	富 士 写 真 フ ィ ル ム (株)		1		1
151	富 士 ゼ ロ ッ ク ス (株)		2		2
152	富 士 通 (株)	1	2		3
153	富 士 通 V L S I (株)		1		1
154	(株) プ リ ザ ス ト ン		1		1
155	(株) フ ジ タ		1		1
156	フ レ ク ト ・ フ ソ ー (株)		1		1
157	(株) 富 士 通 研 究 所			1	1
158	フ ジ テ ッ ク (株)	1			1
159	本 田 技 研 工 業 (株)		2		2
160	本 田 工 業 (株)		1		1
161	本 多 電 子 (株)		1		1
162	ポ リ プ ラ ス チ ッ ク ス		1		1
163	(株) マ キ タ 電 機 製 作 所	1			1
164	松 下 電 器 産 業 (株)		6		6
165	松 下 電 工 (株)		1		1
166	マ ッ タ ダ (株)	1	1		2
167	松 下 寿 電 子 工 業 (株)	1			1
168	前 田 建 設 工 業 (株)		1		1
169	松 下 通 信 工 業 (株)		1		1
170	(株) 松 下 電 器 シ ス テ ム 名 古 屋 研 究 所		1		1
171	三 井 石 油 化 学 工 業 (株)		1		1
172	三 菱 自 動 車 工 業 (株)		3		3
173	三 菱 重 工 業 (株)		2		2
174	三 菱 製 紙 (株)		1		1
175	三 菱 電 機 (株)		5		5
176	三 菱 電 機 メ カ ト ロ ニ ッ ク ス ソ フ ト ウ ェ ア (株)	1			1
177	三 菱 レ イ ヨ ン (株)		1		1
178	ミ ノ ル タ カ メ ラ (株)	1	2		3
179	(株) 村 田 製 作 所		1		1

No	就 職 先	学 部	修 士	博 士	計
180	宮 城 日 本 電 気 (株)		1		1
181	三 菱 電 機 エ ン ジ ニ ア リ ン グ		1		1
182	(株) 三 浦 周 治 ア ト リ エ		1		1
183	三 菱 電 機 マ イ コ ン 機 器 ソ フ ト ウ ェ ア (株)	1			1
184	山 武 ハ ネ ウ エ ル (株)		1		1
185	ヤ マ ハ (株)		4		4
186	ヤ マ ハ 発 動 機 (株)	1	1		2
187	横 河 ヒ ュ ー レ ッ ト ・ パ ッ ト カ ー ド (株)		1		1
188	横 河 電 機 (株)		1		1
189	リ ン ナ イ (株)	1			1
国 の 機 関					
190	特 許 庁		2		2
191	農 林 水 産 省	1			1
192	豊 橋 技 術 科 学 大 学			4	4
193	東 京 農 工 大 学			1	1
194	石 川 工 業 高 等 専 門 学 校		1		1
195	鈴 鹿 工 業 高 等 専 門 学 校			1	1
196	釧 路 工 業 高 等 専 門 学 校		1		1
197	宮 城 工 業 高 等 専 門 学 校		1		1
そ の 他 の 公 共 機 関					
198	青 森 県	1			1
199	熊 本 県	1			1
200	埼 玉 県	1			1
201	滋 賀 県		1		1
202	東 京 都		1		1
203	日 本 原 子 力 研 究 所			1	1
合 計		60	226	13	299

(平成3年12月末日現在)

第41回東海地区国立大学体育大会成績一覧表

番号	種目	順位		優勝	準優勝	第3位	第4位	第5位	第6位	第7位	第8位	備考
		男	女									
1	陸上競技	男		静大 10	岐大 8	名大 6	愛教大 5	三重大 4	豊技大 3	名工大 2	浜医大 1	
		女		静大 6	愛教大 5	岐大 4	名大 3	三重大 2	浜医大 1			
2	水泳	男		名大 10	三重大 8	静大 6	岐大 5	愛教大 4	名工大 3	浜医大 2	豊技大 1	
		女		愛教大 6	名大 5	三重大 4	岐大 3	静大 2	浜医大 1			
3	硬式野球			静大 8	名工大 6	(愛教大 3, 名大 3, 豊技大 3, 三重大 3, 岐大 3)						
4	準硬式野球			静大 8	愛教大 6	(岐大 4.5, 浜医大 4.5)		(名大 2, 名工大 2, 三重大 2)				
5	硬式庭球	男	(豊技大, 三重大, 浜医大, 名大, 岐大, 名工大, 静大, 愛教大)									オープン
		女	(三重大, 浜医大, 名大, 岐大, 名工大, 静大, 愛教大)									オープン
6	軟式庭球	男	(豊技大, 三重大, 浜医大, 名大, 岐大, 名工大, 静大, 愛教大)									オープン
		女	(三重大, 名大, 岐大, 静大, 愛教大)									オープン
7	バスケットボール	男		名大 10	愛教大 8	静大 6	岐大 5	名工大 4	三重大 3	豊技大 2	浜医大 1	
		女		静大 5	愛教大 4	三重大 3	名大 2	岐大 1				
8	バレーボール	男		三重大 10	愛教大 8	岐大 6	静大 5	名大 4	豊技大 3	浜医大 2	名工大 1	
		女		岐大 5	愛教大 4	静大 3	名大 2	三重大 1				
9	卓球	男		名大 8	静大 6	名工大 5	岐大 4	豊技大 3	三重大 2	愛教大 1		
		女		愛教大 6	静大 5	名大 4	岐大 3	三重大 2	名工大 1			
10	バドミントン	男		名大 10	静大 8	岐大 6	三重大 5	名工大 4	愛教大 3	浜医大 2	豊技大 1	
		女		三重大 8	愛教大 6	名大 5	静大 4	岐大 3	名工大 2	浜医大 1		
11	サッカー			静大 10	愛教大 8	三重大 6	岐大 5	豊技大 4	名大 3	名工大 2	浜医大 1	
12	ハンドボール	男		名大 10	愛教大 8	豊技大 6	名工大 5	静大 4	岐大 3	浜医大 2	三重大 1	
		女		愛教大 4	三重大 3	岐大 2	静大 1					
13	柔道			名大 8	静大 6	(豊技大 4.5, 三重大 4.5)		(愛教大 2.5, 名工大 2.5)		岐大 1		
14	剣道	男		名工大 10	名大 8	静大 6	三重大 5	(岐大 2.5, 豊技大 2.5, 愛教大 2.5, 浜医大 2.5)				
		女		岐大 6	静大 5	愛教大 4	(三重大 2, 名大 2, 浜医大 2)					
15	体操	男		静大 6	名大 5	愛教大 4	名工大 3	岐大 2	三重大 1			
		女		(岐大, 静大)								
16	馬術			名工大 6	愛教大 5	(名大 3.5, 三重大 3.5)		(静大 1.5, 岐大 1.5)				
17	空手道			浜医大 10	名大 8	岐大 6	愛教大 5	豊技大 4	名工大 3	静大 2	三重大 1	
18	弓道	男		愛教大 8	三重大 6	(名工大 4.5, 岐大 4.5)		(静大 2, 名大 2, 浜医大 2)				
		女		静大 8	岐大 6	名大 5	愛教大 4	名工大 3	三重大 2	浜医大 1		
19	アーチェリー	男	(三重大, 岐大, 静大)									オープン
		女		愛教大 4	岐大 3	三重大 2	静大 1					
20	少林寺拳法			名大 8	愛教大 6	三重大 5	静大 4	岐大 3	豊技大 2	名工大 1		
総合順位		男		名大 108.5	静大 98.5	愛教大 87	(三重大 70, 岐大 70)		名工大 64	豊技大 39	浜医大 30	
		女		愛教大 47	静大 40	岐大 36	三重大 29	名大 28	(浜医大 6, 名工大 6)			

(備考) 表中の大学名の右数字は得点を示す。

豊橋技術科学大学同窓会報表紙CGコンテストのご案内

1. 目 的

豊橋技術科学同窓会（以下、「同窓会」と記す）では、会員との連絡誌として同窓会報を発行してきました。今回この会報の表紙を飾るにふさわしいコンピュータグラフィックスアートを募集します。この中の優秀作品は今後発行予定の同窓会報の表紙として採用し、長くその栄誉をたたえます。

2. 応募規定

以下にコンテストの応募規定を示します。

応 募 資 格: 本学に関係する方ならどなたでも（学生、教職員、OB、OG、教務補佐、研究補佐の方等々。もちろん、その家族の方もOK）応募できます。

応 募 作 品: コンピュータグラフィックスを利用して描画されたもので未発表のオリジナル作品に限ります。応募作品はできるだけ鮮明なハードコピーイメージで提出してください。（必要に応じてイメージファイルでの提出もお願いすることもあります。）なお、作品の大きさ、色（モノクロ、カラー）などは問いません。また、作品の内容については特に規定はありませんが、「技術科学大学」にふさわしいものをお願いします。作品の題名及び内容についてのコメント、利用したコンピュータやグラフィックス装置などの技術データも添付してください。（応募された作品は返却しません。作品に対する著作権は同窓会に帰属することになります。）

応 募 方 法: 製作者、応募者氏名、作品名、作品に対するコメント、および利用したコンピュータやグラフィック装置等の技術データを添えて、次の住所宛にお送り下さい。（同窓会表紙CGコンテストと朱書きしてください。）

〒441 豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1
情報工学系

奥山 徹

応 募 期 間: 平成5年4月1日～平成5年8月31日（当日消印有効）

（なお、在学生等につきましては、平成5年の6月～8月にかけて公募する予定です。）

賞金及び賞品: 会長賞 金5万円

特 選 金3万円

入 選 金1万円

佳 作 金5千円

参加者全員に参加賞進呈、入賞者には同時に賞状を授与します。

発 表: 入賞者には直接通知します。また、同窓会報誌上にて発表致します。（参加者全員に該当する同窓会報を送付します。）

なお、上位入賞者の作品は平成5年度以降、実際に同窓会報の表紙として使わせていただきます。

表 彰 式: 技科大祭の間に行う予定です。

同窓会事務局より会員の皆様へ

会長就任の挨拶及び会則改訂について

2系5期 近 藤 秀 範

同窓生の皆様には、お元気でご活躍の事と思えます。

さて、本年3月の役員会において、西沢一氏が会長を辞任され、今期より私が、会長を務めさせていただくことになりました。微力ではございますが、2年間、精一杯、務めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

同窓会が組織されて、早や10年が経ちました。この会報が発行されているころには、同窓会設立10周年記念総会が盛大に催されていることと思います。この10年の間、同窓会を、運営していくうえで、事務局の設置や系別同窓会の発足等、同窓会の運営方法や組織面で、会則に照らし合わせて、多少の差異が生じてまいりました。

そこで、今期から、同窓会について今一度考え直し、会則の改訂、組織変更を含め、実体に即した同窓会に是正するための活動を行っていきたいと思います。

まず、第一に会則の改訂を行います。現在の会則は昭和58年に制定されてから、昭和61年に会費規定についてマイナーチェンジを行い、今に至っております。その間、博士課程の新設や、系別同窓会の発足、評議員制度の有名無実、同窓会事務局の設置など、会則に定められていないものや、会則に即していない事項が発生してまいりました。

そこで、会則を現在の同窓会の実状に近付けるべく、全面的に改訂します。

主な改正点は、まず、会員資格を学部卒業生に限ら

ず、本学に学籍を置いた者とし、これにより、中退者、修士課程だけの社会人大学院生、博士課程在籍者をもカバーする内容になっております。

第2に、会の組織を変更します。本同窓会は、系別同窓会の連絡協議会的な存在とし、主な活動は各系別の同窓会に任せる形を取ります。そして、系別同窓会を持たない系は、その活動を本同窓会が代行する形をとります。そして、本同窓会の役員は、各系別の同窓会から派遣する形で選出されます。

第3に、会費の徴収方法を変更します。現在は、年会費1,000円ということで、会員の皆様には、毎年、お振込いただいておりますが、その徴収コスト及び手間が無視できないくらいの負担となって役員にのしかかってきております。また、会員の皆様からも、毎年、1,000円の送金をする手間が面倒だ、との声を多く聞いております。

そこで、10年分一括して、ご納入いただくことに変更したいと思います。そうすることによって、事務効率化を計り、会員の皆様のお手間を省ければと思います。

以上が、今回の同窓会の是正活動の概要です。今回の会則改訂を含め、同窓会の運営の正常化、円滑化及び同窓会活動の活性化を基本方針として、運営していく所存でございます。会員皆様のご理解とご支援の程をお願い申し上げます。

平成4年9月27日

■同窓会事業報告 (平成3年度から平成4年度)

1. 会報の発行

平成3年度の会報については、平成2年度分が未発行であったことに対する反省から、大学内の役員を中心に編集スタッフを充実させた。そして、平成2年度分の原稿も含め、内容も一新した会報を8, 9合併号として発行した。平成4年度の会報10号(本号)については、例年通り今年度12月に発行する。

2. 会員名簿第3号の発行

平成4年度の会報と同時期に発行する予定で現在作業を進めている。第2号は正会員のみからなる名簿であったが、今回は過去に在職された教官、現職の教官を名簿に載せる計画である。

3. 第5回総会の開催

第5回総会を今年12月19日に開催する予定で準備を進めている。今回は総会と同時に講演会、懇親会を開催し盛大に行う予定である。総会を通じて会員同士の親睦を図り、総会を会員にとって意義のある集まりとしたい。

4. 卒業記念パーティの後援

新会員の同窓会活動への理解を深めてもらうことを目的に、在学生で構成される学友会が主催する卒業記念パーティに毎年資金援助している。平成3年度は実施済み、4年度も実施予定である。

5. 会計システムの整理 (実施中)

現在、入会金未納会員、年会費未納会員には、基本的に会報、名簿の発送は停止することになっている。しかしながら、現在の会計システムでは、入会会員、年会費納入会員の識別が難しく、会員からの年会費納入状況の問合せにも、即座に答えられない状況にある。このため、平成2年度より、名簿管理プログラムを改良し、入会および会費納入に関する情報もデータ

ベース化する作業が進められている。

6. 平成4年度同窓会役員の構成

名誉会長	佐々木慎一	学長
顧問	関東 康祐	(1系助教授)
	梅本 実	(工作セ助教)
	朴 康司	(3系助教授)
	船橋 賢一	(4系講師)
	西山 久雄	(5系助教授)
	松本 博	(6系助教授)
	伊藤 嘉房	(7系教授)
	尾崎 一志	(8系助教授)
会長	近藤 秀範	(2系5期)
副会長	江崎 尚和	(2系1期)
副会長	橋爪 進	(2系7期)
事務局	江崎 尚和	(2系1期)
	橋爪 進	(2系7期)
監事	田中 勝	(6系5期)
会計担当	奥山 徹	(4系1期)
	奥田 隆史	(4系6期)
	山本 幹雄	(4系5期)
	石井 宏幸	(4系10期)
編集担当	水嶋 生智	(5系5期)
	川口 正剛	(5系6期)
	佐藤 裕久	(5系7期)
名簿担当	奥山 徹	(4系1期)
	奥田 隆史	(4系6期)
	山本 幹雄	(4系5期)
	石井 宏幸	(4系10期)
	高橋 岳之	(7系4期)
	神山 斉己	(7系7期)
総会担当	柳田 秀記	(1系1期)
	江崎 昇二	(1系3期)
	正田 要一	(6系1期)
	田中 勝	(6系5期)

* 年会費納入のお知らせ *

平成2年3月までに修了あるいは卒業された会員は、必ず年会費1,000円を納入して下さい。尚、当年度内に会費納入無き場合は、未納会員として登録し、以後会報、名簿等の発送を停止します。

納入方法 …以下のいずれかの方法で御願います。

①銀行等の金融機関により下記まで御振込下さい。

住友銀行 豊橋支店 普通預金 口座番号 368127
豊橋技術科学大学同窓会
豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1 豊橋技術科学大学内

同封の振込用紙により住友銀行支店にて御振込の場合は振込手数料は不要です。(手数料は本会負担)

他の金融機関にて御振込の場合は振込手数料は振込本人の負担となりますので予め御了承下さい。

②郵便局にて下記まで御振込下さい。用紙は郵便局備え付けの払込通知票を使用して下さい。

この場合も払込料金は加入者(本人)の負担となります。

口座番号 名古屋6-17220
加入者名 豊橋技術科学大学同窓会

いずれの場合にも振込人の氏名の欄あるいは通信欄に会員番号も記入して下さい。

※会計の事務処理上、1993年3月末日までに振込をお願い致します。

同窓会収支報告および平成4年度予算案

	平成3年度予算	平成3年度決算	平成4年度予算
前年度繰越金	4,229,603	4,229,603	3,301,407
入会金	1,100,000	0	1,000,000
年会費	300,000	427,200	300,000
預金利息	120,000	122,834	100,000
名簿代金	200,000	0	0
会報広告代	100,000	230,000	100,000
小計	1,720,000	780,034	1,500,000
収入合計	6,049,603	5,009,637	4,801,407
通信費	150,000	12,803	150,000
事務費	20,000	173,572	20,000
人件費	200,000	189,200	200,000
交通費	40,000	23,500	50,000
設備費	100,000	—	100,000
役員会経費	20,000	3,000	20,000
会報印刷費	600,000	569,380	600,000
会報郵送費	450,000	516,775	500,000
2系立上がり補助	—	—	100,000
会報投稿謝礼	—	—	20,000
学友会後援会	100,000	100,000	100,000
C G コンテスト	225,000	—	250,000
小計	1,905,000	1,708,230	2,110,000
次年度繰越金	4,144,603	3,301,407	2,691,407
支出合計	6,049,603	5,009,637	4,801,407

* “—” は、その年度に計画されていないものを示します。

* 同窓会会員名簿第3号追加注文の御案内 *

会員名簿第3号が、平成3年12月発行する予定です。現在、在庫が多数ありますので、会員の皆様方へ注文下さいますようお願い申し上げます。

申込み要領

お近くの郵便局にて、郵便局に備え付けの振替用紙により、名簿代金を同窓会までお振り込み下さい。ご入金を確認され次第、会員名簿を送らせていただきます。

口座番号	名古屋4-47418
加入者名	豊橋技術科学大学同窓会
名簿代金	¥2,500 (払込手数料は本人負担)

なお、振込用紙に記載された住所へ会員名簿を送付いたしますので、振替用紙には住所・氏名・電話番号を正確にご記入下さい。また、氏名の下に修了（卒業）年のご記入もお願いいたします。

「 熱意ある
同窓会スタッフ
を求めます 」

応募資格：TUT修了・卒業の方

(名古屋，豊橋近郊)

勤務：年3回程度の会議

及び自宅での作業（約30hr/年）

待遇：同窓会規定により優遇

交通費支給

問い合わせ先：TUT同窓会事務局

* 豊橋技術科学大学同窓会会則 *

第1章 総則

- 第1条 本会は、豊橋技術科学大学同窓会と称する。
- 第2条 本会は、本部を豊橋技術科学大学内に置く。
- 第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、豊橋技術科学大学の発展に寄与することを目的とする。

第2章 事業

- 第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
- (1) 会員名簿の発行
 - (2) 会報の発行
 - (3) 総会の開催
 - (4) その他、本会の目的を達成するために必要とされる事業

第3章 会員

- 第5条 本会は、次の会員をもって組織する。
- (1) 正会員 豊橋技術科学大学学部卒業生で同大学大学院修士課程に在籍していない者
 - (2) 準会員 豊橋技術科学大学大学院および同大学学部在籍学生
 - (3) 特別会員 豊橋技術科学大学の現職又は退職教官で、役員会において推薦された者
 - (4) 賛助会員 本会の目的を賛助する者で、役員会において推薦された者

第4章 役員

- 第6条 本会に次の役員を置く。
- (1) 名誉会長 (豊橋技術科学大学学長)
 - (2) 会長 1名
 - (3) 副会長 2名
 - (4) 理事 若干名
 - (5) 監事 3名
 - (6) 評議員 各系各期1名
 - (7) 顧問 若干名
- 第7条 役員を選出は、次の各号に定めるところにより行う。
- (1) 会長は、正会員のうちから役員会により選出する。
 - (2) 副会長及び監事は、正会員のうちから会長が推薦する。
 - (3) 理事は、正会員のうちから評議会が推薦した者及び会長の委嘱による若干名とする。但し、理事の過半数は正会員でなければならない。
 - (4) 評議員は正会員各系各期より1名推薦された者に会長が委嘱する。但し、各系各期は原則として学部卒業の時点でグループ分けするものとする。
 - (5) 顧問は、役員経験者もしくは特別会員で役員会において推薦された者とする。

- 第8条 会長及び副会長の任期は3年とし、他の役員の任期は2年とする。但し、留任を妨げない。なお、任期終了後も、後任者が決定するまでは、その職務を継続する。

- 第9条 1 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
- 3 理事は、庶務、会計及び会報等の編集事務を処理する。
- 4 監事は、本会の財産及び会計を監査する。
- 5 評議員は、重要な会務に参与する。
- 6 名誉会長及び顧問は、本会の運営について助言を与え、会長の要請に応じて総会及び役員会に出席し、意見を述べることができる。

第5章 総会

- 第10条 1 総会は、定期総会及び臨時総会とし、会長が招集する。
- 2 定期総会は、3年に1回10月に開催することを原則とする。
- 3 正会員の100名以上が、会議の目的事項を示してその開催を請求したとき。
- 4 会長は、総会を招集するとき、事前に文書で正会員に通知しなければならない。
- 第11条 総会は、次の事項を審議し、議決又は承認する。
- (1) 事業計画及び収支予算
 - (2) 事業報告及び収支決算
 - (3) 会則の制定・改廃
 - (4) その他、同窓会の運営に関し、重要な事項
- 第12条 総会の議事は、出席正会員の過半数で決め、可否が同数のときは議長が決める。但し、会則の改廃は、出席正会員の3分の2以上の承認を必要とする。
- 第13条 総会の議長は、その都度正会員のうちから選出する。

第6章 役員会

- 第14条 役員会は、第6条第2号から第5号までの役員により構成する。
- 第15条 役員会は、会長が招集し、次の事項を審議する。
- (1) 総会で決定された事業
 - (2) 総会への事業報告及び決算報告
 - (3) 総会に提出するその他の議案
 - (4) 特別会員及び賛助会員の推薦に関する事

- 第16条 役員会の議決は、役員会を構成する役員の過半数が出席し、その過半数の同意を必要とし、可否が同数のときは議長が決める。但し、出席できない役員は委任状をもって出席役員に議決を委任することができる。

- 第16条の2 役員会の議長は会長が務める。

第7章 会計

- 第17条 本会の運営に必要な経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってこれに充てる。但し、必要に応じて、総会の議決により、臨時費を徴収することができる。

- 第18条 本会の会費は次のとおりとする。

- (1) 入会金 3,000円
- (2) 会費 1,000円

- 2 会費の納入は正会員のみとする。
- 3 正会員もしくは準会員として初めて本会に入会するときには、入会金及び初期2年分の会費を納入する。

- 第19条 既納の会費は原則として返納しない。但し、準会員が卒業もしくは修了以前に学籍を離れた場合に限り、半年以内に請求があれば返納する。

附則

- 正会員は、3年目から年会費を納付しなければならない。
- 本会則は、昭和61年10月12日から施行する。
- 第20条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月末日に終わる。

第8章 雑則

- 第21条 本会則施行に必要な事項は、役員会の議を経て会長が定める。

附則

- 1 本会則は、昭和58年10月9日から施行する。
- 2 会員は、住所、氏名、職業を変更の都度、すみやかに本部に通知しなければならない。

— 編 集 後 記 —

同窓会会報も記念すべき第10号となりました。まずは無事完成することができ、編集委員一同、ほっと胸をなでおろしております。また、会報を作製するにあたり、ご執筆、ご協力いただきました皆様に心より感謝致します。

会報づくりは毎年7月ころ始まります。まず編集委員で内容を議論し、各方面に原稿を依頼し、収集、印刷して12月に発送となります。会員の皆さんに少しでも喜んでいただけるような会報にしたいと、編集委員ならびに同窓会役員一同、努力しております。そんな中で感じることは、最近の会報は同窓会事務局からの一方的な連絡になり、多少マンネリ化しつつあるのではないかと、ということです。もう少し会員の方々の「生の声」を掲載できればと思うのですが、いかがでしょうか。そこで、より気軽に投稿していただけるように、次回の会報には「会員からの一言」という新コーナーを企画しております。会報づくりへの皆さんの積極的なご参加を期待いたしております。また、会報に対するご意見やご批評もお寄せ願えれば幸いです。

同窓会も設立して10年が過ぎ、会員数3,500名を越える大規模なものとなりました。会報を、また同窓会活動をより充実させるよう役員一丸となって努めてまいりますので、会員の皆さんのご理解とご協力、よろしくお願い致します。

広報担当者 様

豊橋技術科学大学同窓会誌広告掲載のご依頼

拝啓、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、当同窓会では、より円滑な運営を図るべく、同窓会誌に広告を掲載することに致しました。

つきましては、下記のように掲載広告を募集していますので、広報担当者にお口添えくださいますようお願い申し上げます。

発行後、見本として5冊は無料でお送りしますが、その他は有料（500円/冊）となります。6冊以上必要な場合は版下送付の際にお申し添え下さい。

ご多忙中、お手数をお掛け致しますが、宜しくお取り許らい下さいますようお願い申し上げます。

敬 具

1992年12月15日

豊橋技術科学大学同窓会 会長 近藤 秀範

記

◎同窓会誌：B5版，30ページ，白黒

(1) 内容…学内近況報告，研究室紹介，事務官より 等

(2) 発行…年1回

(3) 部数…約4000部 *今後400部/年で増加

◎広告掲載料：5万円/1ページ，3万円/0.5ページ

◎送 付 先：豊橋技術科学大学同窓会

愛知県豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1 〒441

◎締め切り：'93年9月末日

◎支払い方法：銀行振込 *発行後，請求書をお送します。

◎問い合わせ先：下記まで郵送にてお願いします。

〒441 愛知県豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1

豊橋技術科学大学同窓会 事務局